

序

筑波大学では二〇〇五年以降、三回にわたり石井昭氏から二〇〇件を超える貴重な美術品等の寄贈を受け、教育研究資源として活用しています。そして、専用の収蔵庫を整備して保管しつつ、ひろく社会にむけて公開するため、その一部を筑波大学大会館内に置かれた「筑波大学ギャラリー」の一室において常設展示するとともに、同じく大会館内の「アトスベース」で定期的に小規模な特集展示が開催されています。

石井コレクションの管理を任されている芸術系研究組織においては、二〇一〇年に開催された「石井コレクション特集展示 瑛九」にあわせて企画した「石井コレクション 瑛九作品をめぐるワークショップ」を皮切りに、国内外の第一線で活躍する優れた研究者や頭角を現しつつある若手研究者を招き、多様な視点から石井コレクションの作品に迫る研究集会を毎年のように実施してきました。本書巻末に資料篇として「石井コレクション特集展示」と「石井コレクションをめぐる研究会およびワークショップ」があるので、ご参照ください。

その一覧からもわかるように、研究集会のテーマとなったのは、近現代の主として油彩画とその作家です。いずれも美術史上で名の通った存在であり、研究者を招くのに苦労するようなことのない作家ばかりです。なお、石井コレクションは国内外の近世・近代陶磁など工芸が半数を占めますが、それらについてはまだ研究集会を実施していません。

これまで研究集会などの終了後に、そのつど報告書『石井コレクション研究』を編集し、二〇一九年度末の時点で七冊の成果を刊行してきましたが、限られた部数を大学や美術館等の関係機関に送付するにとどまっていた。

こうしたことから、本書は、従来の研究成果を一書にまとめるばかりでなく、石井コレクション作品の学術的な意義をより広範に社会一般に普及することを目指して編集されました。それぞれ既刊の報告書に掲載された論文を土台としてはいますが、近現代美術が中心で研究の進捗が早いことにも鑑み、各著者にはふさわしいアップ

データを求める一方、瑛九の研究で最前線に立つ研究者による新稿も加えることにしました。

また本書の基本的な構成については、研究集会の開催順（すなわち報告書の刊行順）ではなく、美術家の生年順によることとしました。もとより研究集会のプランニングにおいては、講師の陣容から招請、集会の実施まで、さまざまな調整が必要のため、系統立ててプログラムを作成することは現実的ではありませんでした。

研究集会におけるテーマの設定については、発表者の問題意識を尊重するとともに、なるべく作品と作家についての多様な視点と多彩な評価を提供するように努めました。したがって、報告書『石井コレクション研究』においても本書においても、美術史によるオーソドックスなアプローチ（たとえば、藤田嗣治の作品についての作品論や時代動向からの検討、あるいは国吉康雄に関する米国交流協定校研究者による寄稿）ばかりではなく、藤田の作品に関する保存修復家の見解や、瑛九作品にあつては筑波大学の芸術系研究組織の特性を活かした版画制作者による技法に関する見解が盛りこまれています。また、それぞれの論考が扱う時代も、藤田や国吉の一九二〇年代から福島秀子や池田龍雄らの戦後の一九五〇年代まで、地理的にもヨーロッパ、アメリカ、日本というように、幅広い幅をもつことになっています。

こうした本書における石井コレクションをめぐる各論者による多様な意見の交通が、石井コレクションのみならず、美術一般のさらなる理解につながることを願つてやみません。そして、本書で論じられた作品の一部は筑波大学ギャラリーに展示してありますので、ぜひ御覧いただければと存じます。

最後になりますが、石井昭氏をはじめ、本書が成りたつまでにさまざまなかたちでご協力を賜った関係各位と、本書編纂にご協力いただいた各位に謝意を表します。

二〇二一年四月

五十殿利治
寺門臨太郎